



まつした よしひこ
【一宮館主賞】 松下 喜彦

ずっとベッドに横になったままの母さん。
時々、僕のことを分からなくなる母さん。
食べ物が喉に詰まるから、
口にするものには全てとろみをつけた半固形物でなくてはならない母さん。
豊かだった身体は小さくなって、足は針のようです。
その足をさすっていると、地震で半ば倒壊した家の前で、
「大丈夫。大丈夫。」と豪快に笑っていたことが昨日のように思い出されます。
あの言葉に、僕はどれだけ励まされたか。
その笑顔はまるで青空のように澄み渡っていました。
幼い頃、熱を出した僕を背負い、暗い夜道を医者まで走ってくれたこと。
その時に見た満月が、大きくて赤かったこと。
あの背中が、僕にとっては世の中の全てでした。
高熱でうなされ、意識もはっきりしない病から生還した、その瞬間、
僕の手を握り、赤い目で見守ってくれた母さん。
どんなに、心強かったか。
その目はあたたかく、古里そのものでした。
この足で踏ん張り、子を包容し、守り、育ててくれたこと。
頭よりも、僕の体が確かに覚えています。
母さん。大好きです。
僕のことをすっかり忘れてしまっても、僕はしっかり覚えています。

(兵庫県／55歳／自営業)

